



叶谷 守久さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：5月30日

まずは健康でいることと、 自分に言い聞かせています

大震災発生当日、津波から逃れる最中に奥さまを亡くされ、ご自分も足に大怪我を負われたため、県外での長期入院を強いられたそうです。退院後は土湯温泉に避難した後、2011年7月から福島市笹谷東部仮設住宅に移られ、別所帯ですが、ご長男家族と共に暮らしていらっしゃいます。

■詩吟の先生が訪ねてくださりなかつたら、どうなっていたでしょう
3月11日は、いわきでの会議から昼に戻り自宅で一休みした後、勤務先だった相馬双葉漁業組合請戸支所に行き、地震に遭いました。鉄筋2階建の建物が左右に大きく揺れ、地面のコンクリートの間からは水が吹き出していました。咄嗟に津波が来ると思い、急いで帰宅しました。妻は笑いながら倒れたテレビや額の片付けをしていましたが、車で大平山の麓まで行きました。振り返ると、真つ黒い大きな壁とモヤモヤとした水蒸気が立ち上り、私は思わず崖によじ登



▲40歳代の頃にご夫婦で撮った思い出の写真と共に

り、妻を引き上げようとしたが、左足が木の根に引っかかり、手を放してしまいました。山頂に這い上がると人影がありました。ようやく呼びかけに応えてくれたのは後輩でした。離れ離れになった両親を探しに行った彼を待つ間、落ち葉を服の中に詰め込み、寒さを凌いでいました。手を借りながら山を下り、瓦礫だらけの中を歩いていくと、消防車が通りかかり、浪江町役場に避難できました。翌朝、避難指示が出ると大勢の人たちが一斉に移動し、私は知人に便乗して南相馬市に向かい、かかりつけの病院に行くことになりました。骨折した足の手術を即刻入院、骨折した足の手術をするようになりました。その2日後、南相馬市にも避難指示が出され、17日に白石市の公立刈田総合病院に移され、足の手術を受けました。病院には一人も知り合いはおらず、とても不安でした。

福島市に避難していた息子たちと連絡を取り、妻を探しました。二本松や相馬の遺体安置所を廻り、ようやく6月25日にDNA鑑定によって本人と認められ、7月31日に葬式を行いました。最後まで一緒にいたのに妻を助けることができなかつたことに、自分で自分を責める日々が続きました。そんな時に、詩吟の先生が避難先の土湯温泉に訪ねて来られ、「声を出してみませんか」とおっしゃいました。周りの会話がなく声も出ませんでした。声を出して思い切った転機となったように思います。

浪江のこころ通信



・第37号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第37号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





小野田康浩さん(幾世橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：6月5日

仮設の生活には慣れたけれど、 だんだん腹が立ってきました

小野田さんは浪江で生まれ、ご両親の仕事の関係で東京に育ちましたが、浪江の祖母が亡くなったことをきっかけに、約10年前にご家族で浪江に戻ってこられました。震災前に脳梗塞を発症し、その後遺症のために休職中とのこと。

現在お住いの二本松市岳下住民センター仮設住宅では、三代目の自治会会長を2年務めていらっしゃいます。

■まさか、まさかの連続で、寒かったことだけを覚えています
あの日は、母と一緒に家に居ました。相当な揺れでしたが、母屋のグシ瓦が崩れ、壁に亀裂が入ったものの、さほどの損害はありませんでした。停電でしたので、蝋燭と石油ストーブで夜を明かしました。時々大きな余震があり、その度にストーブを消したり点けたりしていました。翌朝午前6時頃に避難指示の放送があり、母を隣家に預け、私は犬を連れて浪江高校に行きました。そこから荻野小学校に移動すると、バスに乗せられ津島に向かいましたが、2時間くらいしか滞在しなかったと思います。川俣高校体育館に避難しましたが、4月に高校の授業が再開することになり、月半ばに川俣町の旧小島小学校に移り、さらに猪苗代町の民宿に二次避難をしていました。

避難の際に離れ離れになった母は、隣の家族と共に二本松市東和の体育館に避難したものの、気管支を患って二本松病院に入院しました。私も何度も猪苗代から通いました。病院から介護老人施設「サンビュー」へ移り、仮設住宅に入居する1ヵ月前の7月に亡くなりました。入院中に友だちが出来て退院したくなかったように、移転先の「サンビュー」から仮設住宅に移りました。



▲年末恒例、絆まつりの写真の前で
この地域全体のお祭りは、岳下住民センターの住民ばかりではなく、永田農村広場仮設住宅や市内の借上げ住宅の方々も参加され、地域の方々やJICA二本松（独立行政法人国際協力機構）や支援活動団体の協力により賑やかに開催されているそうです。

集会所は卓球や縫物を楽しむ住民が利用したり、定期的に支援活動団体さんが訪れてお茶会や体操教室などが開かれたり、野菜の差し入れもしてくださいます。毎週火曜日には近所の農家さんによる野菜の移動販売もあります。自治会では集会所の非常口を窓ではなく掃出し戸にして欲しいとか、雨漏りがする風除室を修繕して欲しいなどの要望を町にお願いしているのですが、なかなか難しいようです。今、個人の望みは、復興公営住宅を早く建てて欲しいということだけです。はっきりとした時期を示せない町の立場も解りますが、やっぱり先の見通しを知りたいというのが本音ですよ。



柴口 武雄さん・サツキさん(権現堂)

取材者：浪江町役場 舛田・嶋原
取材日：5月30日

笑顔で会える日が来るのを祈っています

埼玉での避難生活を経て、今年4月から南相馬市で暮らし始めた柴口ご夫妻。赤い帽子がトレードマークの武雄さんは、若いころから興味のある天文や考古学を情熱を持って続けていらっしゃいます。奥様のサツキさんは、避難後に新たにパッチワークを始めたり、日本舞踊を再度習うなど何事にも意欲的です。

現在入居されている施設では、ご夫婦が隣同士のお部屋のため、壁を“トントン”とノックして“おやすみなさい”の合図をなさるなど、穏やかに暮らしながら、浪江を忘れることなく帰ることを願っていらっしゃいます。



▲ご友人が撮影した日食の写真を手にする武雄さんと手作りのパッチワーク作品を手にするサツキさん

息子のお嫁さんの実家がある山形で2週間避難させてもらってから、娘のいる埼玉で3年過ぎました。埼玉は大変気候の良い所で風邪ひとつひかず、近所の人にも良くしてもらい、友人もできて楽しく暮らしましたが、ずっと福島に帰りたいと思っていました。

天文に興味を持ったのは中学生の頃で、20年ほど前から日食を観るためにブラジル、タイ、アフリカ、中国など海外にも行き、撮った写真をマリンパークや役場に飾ってもらったりしていました。避難していた埼玉は、予想以上に星空が綺麗で、妻に星の名前を教えることができました。南相馬でも二人で星空を眺めています。住まいの近くに

ある古墳は、高校生の時に測量に参加し史跡指定された桜井古墳で、先日は二人で散歩して写真を撮ってきました。アルバムを作っていますが、もう一度行って説明文をつけて完成させたいと思っています。住まいには、息子の手作りの神棚があり、毎日、一番初めに頼むことは、放射能が早くなくなるようにという事です。町長が浪江を直して呼んでくれるから大丈夫、将来は浪江に帰れると思っています。元気にやっています。町には1日も早く帰れるようにお願いしたいです。

たちも南相馬で暮らすことにしました。離れた家族と集まれるようになり嬉しく思います。浪江の自宅には、望遠鏡や専門のカメラを設置した手作りの天文ドームがあります。趣味の天文に打ち込めると思っていた時に震災が起きました。今は、そのままにしてきた機材が使えるか心配です。

*サツキさん
埼玉にいる時に何かがないといけないと思って、大正琴やパッチワークを始めました。その時できた友人が今も生地などを送ってくれているのでパッチワークを続けています。6月からは、浪江で10年やっていた日本舞踊を週1回始めることにしました。浪江のことを忘れたことは一度もなく、海の匂いを思い出します。浪江に帰って、みんなと笑顔で会えるようにと祈っています。